

Museum Micro Report

博物館三二通信

▼博物館HP



市立博物館では、年間をとおしてさまざまな講座や展示、研究などを行っており、子どもから大人まで幅広く知的好奇心を育てています。

この連載では、所蔵資料や学芸員の研究活動などをテーマに、博物館の魅力を発信します。

興味がある方は、ぜひ市立博物館へ。

市立博物館 ☎ (22) 3 3 2 0

第11回

時の流れに埋もれた“県道、

●この道なんの道？

士別市立博物館で展示している、下の写真は知っていますか？今回は、この写真から士別の歴史を紐解いていきます。



▲「上川郡士別村士別川渡船場之景」明治34年（北海道大学附属図書館北方資料室所蔵）

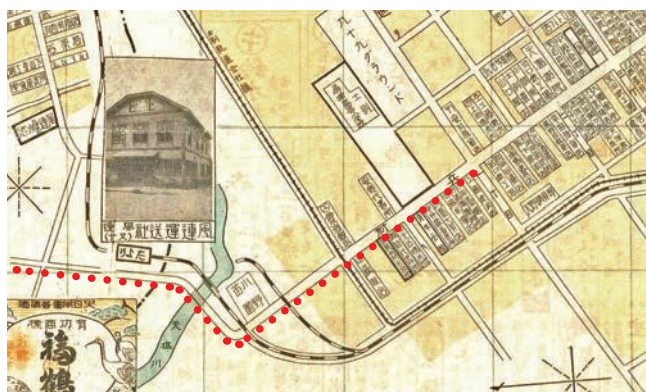
●大内渡船場と仮定県道

上の写真は、明治末期に天塩川の兩岸を写したもので、手前側が現在の下士別、奥側が北町方面です。奥には、大内勇記という人物が営んでいた渡船場の建物が写っています。

写真をよく見ると、川を挟んだ手前と奥が道のように続いているのが分かるでしょうか？この道は、現在の「国道」にあたり、当時は「^{ふなわたし}仮定県道」と呼ばれていました。橋がなかった天塩川では、大内渡船場の舟渡が「道路」の役割を担い、人や物を船に乗せて往来を助けていました。

ただし、現在の国道と当時の仮定県道では、若干ルートが異なっています。国道40号の士別橋は、昭和40年に建設されるまで、現在の鉄道橋よりも西側（下流側）に建っていました（「大日本職業明細図」参照）。つまり、仮定県道も現在より西側にあったと考えられます。

では、大内渡船場によって舟渡が行われ、仮定県道と呼ばれた道は現在のどの位置にあたるのでしょうか？



▲「大日本職業明細図」昭和9年（士別市立博物館所蔵）。赤い点線部分が「仮定県道」があったとされる場所。

●仮定県道はどこにある？

右の図は、現在の士別橋と鉄道橋付近の地図です。国道40号を名寄方面へ北上すると、北のガソリンスタンド付近で大きく右に曲がる国道と、直進して北町へ向かう道に分かれています。（赤い円）



この北町方面へ道なりにすすむと（赤点線）、天塩川とぶつかりますが（青点線）、川の向こうの延長線上に、鉄道路線に沿うように道があります（緑点線）。実は、この道が当時の仮定県道です。

現在の道に当時の面影はなく、国道として使われているわけでもありませんが、実は士別の歴史を語るうえで重要な道です。

何気ない風景のなかにも、士別の歴史が息づいています。そういった思いを持ってまちを眺めると、違った士別の一面が見えてくるかもしれません。（中村圭佑学芸員）